救急医学の醍醐味
～その過去，現在，そして未来～

医療法人緑風会病院　　杉本　　侃
株式会社日本病院共済会　　山本　修三

英語のMentor（恩師）は，ホメロスの叙事詩「オデッセイア」に登場するメントルに由来します。彼は親友オデッセイア（ユリシーズ）の子テレマコスの助言者として描かれています。18世紀に広く読まれた「テレマコスの冒険」という小説でこの指導者としてのあり様が強調され，これをきっかけにMentorは恩師というニュアンスで使われるようになりました。現代英語の語感としては，深い尊敬と心からの感謝を含むものでteacherよりは遥かに重い言葉です。

医師としての私のMentorはご指導を受けた順に，杉本侃先生，山本修三先生，Basil A.Pruitt先生，松田博青先生です。今回は，私が20歳代にご指導を受ける機会を得ました，杉本先生，山本先生と鼎談（3人が向かい合って話すこと）を企画しました。Mentorとの鼎談とは，恩師に対し失礼なことかもしれません。しかし，先生方の指導を受け，私が伝え受けた救急医学の醍醐味を，そして伝え受けるという「ことそのもの」を，次世代の人達やさらにその次の世代を指導する方々に伝えたく，敢えて鼎談としました。

杉本侃先生は，昭和30年に大阪大学をご卒業され，消化器外科の領域に進まれました。医学博士号は，胃がんの病理に関わる研究で取得されたそうです。開業されることを考えられ，留学したスイスでは整形外科の臨床に携わられ，骨折の固定器具（AOプレート）を日本に導入されています。その後，大阪大学の特殊救急部の創設（昭和42年）チームを率いて，日本の救急医学を切り拓かれました。私は昭和51年に医師になって直ぐに先生の門下生となりました。

山本修三先生は，昭和34年に慶応義塾大学をご卒業され，やはり消化器外科の領域に進まれました。その卓越した手術は巧みを超えて，美しいと表現されるものでした。私は，杉本先生にお願いして，山本先生のもとで外科の研修を受ける機会を得たのは28歳のときで，自分の人生で最も充実した日々を過ごすことができました。私自身はもう手術をしてはいませんが，山本先生の手術門下生の一人であることの誇りは失っていません。

さて，私のはじめての原著論文は杉本先生から直接に書くことの指導を受けました。丁度そのころに，山本先生からは手術記録の書き方をこれまた直接に教えて頂きました。自分が感じたこと，思ったこと，そして試したことを，文字に書き残すことの大事さを20歳代後半に学びえたことはこの上なく幸運なことであったと思っています。原著論文も手術記録も，これを書く姿勢に変わりはないと思っています。救急医療の現場で起こっていることを，言葉で掬い上げることは，救急医学の大きな醍醐味の一つです。

「昔は良かった。」という回顧的で復古的なお話は，全くするつもりはありません。現在も続く師弟の関係を通して，未来の救急医学の醍醐味を参加される方々に託すことができればと思い企画した次第です。